

不定形の文法的振る舞いの記述のための覚え書 体の形態的対立のスケールの再検証に向けた研究ノート

阿出川 修嘉

《要旨》

阿出川 (2014) では、動詞の体のどちらがどの程度用いられているかを数値として示す「体の形態的対立のスケール」という指標を提案し、可能性のモダリティの意味を持つ述語と語結合をなす不定形の体の選択実態に基づき、このスケール値を算出して動詞の分類を試みた。本稿では、他の言語的条件の場合での値の変化を観察するために、スケール値が 10 を示していた（＝常に完了体で用いられる）動詞を対象として、新たに調査を行なった。最初に、不定形で用いられている場合の総頻度数について調査を行った結果、阿出川 (2014) での調査結果と比較して、スケールの値が変化する動詞と変化しない動詞への分類が可能となった。そのうち変化しないものについて、第 2 の調査として、これらの動詞が不定形以外の諸形態（過去形及び非過去形）で用いられている場合の頻度数について調査を実施した。その結果、不定形以外の諸形態の場合に近似のスケール値を示すものと、スケール値が大きく変化するものがあることが明らかになった。

《キーワード》

ロシア語、動詞、アスペクト、コーパスを利用した調査

1. はじめに

現代ロシア語における動詞の意味・用法において、動詞の諸形態のうち、発話内で最も多様な統語論的、また意味論的な用法を有するのは不定形（инфинитив, неопределенная форма глагола¹）であると言えるだろう。そのため、その文法的振る舞いについての記述は十分なものとは言えず、補完すべき余地も少なからず残されていると考えられる²。とりわけ、不定形が用いられる言語的文脈と、そこに関わってくる他の言語的（形態論的な、あるいは意味論的な）カテゴリーとの相関関係をも考慮に入れた記述を目指す上では、未だ明らかになっていない言語事実や、あるいは規則とされている事項の中でも再検証が

¹ Энциклопедия (1996) の Инфинитив の項を参照 (cf. Энциклопедия 1996: 158-159)。

² 不定形の用法に関する網羅的な記述の試みとしては、Брицын (1990) や Шелякин (2006) などが挙げられるだろう。



必要なものなど多いだろう。阿出川（2014）でも、そうしたカテゴリー間の相互作用という問題のひとつである、不定形の体のカテゴリーの選択と、モダリティの意味との相関関係をめぐる問題が改めて取り上げられ論じられている。

阿出川（2014）においては、コーパスから収集したデータに対する一連の検証の中で、不定形が見せる文法的振る舞いの把握のための試みのひとつとして、「体の形態的対立のスケール」³という概念及びそれを用いた分類が提案されている（cf. 阿出川 2014: 207-218）。この概念は、後述するように、実際のテキストにおける体の選択の実態を、数値化して把握し、客観的に示すために考案されたものである。

しかしながら、阿出川（2014）における「スケール」は、プロトタイプとも言える初期段階のものであることは否めない。後述するように、現時点で得られている数値は様々な制限がある中で得られた値であり、したがって、これらの制限がない場合に（あるいはより少ない制限の下で）「スケール」の値がどのような値を示すのかについてはまだ明らかになっていない。また、この「スケール」の示す数値が、動詞の文法的振る舞いの把握・記述にどの程度資するのかというのも未知数であり、これについても別途検証していく余地が残されている。

以下、本稿では、まず次の第2節で、「体の形態的対立のスケール」という概念と、それが現状抱えている問題点について確認する。次に、それらの問題点を踏まえた上で、いくつかの動詞語彙を対象として取り上げ、不定形の文法的振る舞いを今後追っていくための本格的な調査を行うにあたってのテストケースとして実施した予備調査の内容と結果について報告する（第3節）。最後に、今回の調査結果と、そこから得られる示唆を踏まえた今後の課題について確認する（第4節、第5節）。

2. 体の形態的対立のスケール：その概念と問題点

2.1. 本節の概要

本節では、「体の形態的対立のスケール」という概念の基本的な考え方とその必要性について確認する。この「スケール」は、阿出川（2014）において最初に提案されたが、ここではこの概念を提案するに至った経緯について、まず概観しておこう。

阿出川（2014）では、可能性（内的可能性、外的可能性）のモダリティを表す述語⁴と

³ 以下、単に「体のスケール」、「スケール」などと略することがある。

⁴ 対象とした述語は、мочь, уметь, способен, можно, нельзя, возможно, невозможно, в состоянии, в силах である。このうち、内的可能性をあらわすとされる述語は、уметь, способен, в состоянии, в силах である。対して、можно, нельзя, возможно, невозможно が、外的可能性をあらわす述語と位置付けられている（cf. ТФГ: 131-133）。мочь については、そのどちらの可能性も表すことのできる、多義的で、モダリティの意味特徴の表示について無標であるという特徴を有する述語として扱われている（cf. 阿出川 2014: 96-98）。

語結合をなす不定形を分析の対象として、その体の選択の実態を調査した。この調査の過程において、同一の動詞語彙を有すると考えられる完了体動詞と不完了体動詞（いわゆる「体のペア」を成す動詞）を、ひとつの単位としてまとめて観察した場合、ある特定のペアについて、外的可能性を表す述語、内的可能性を表す述語のうち、どの述語と結合した場合であっても一定の体が選択されるという、ある種の偏向的な特徴を見せていることが明らかになった。このような、ペアを成す動詞ごとの、形態選択における偏向的な特徴を数値化して表わすために「スケール」という指標を提案し、それを用いて動詞語彙の分類を行った。

次節では、この「スケール」の算出方法とその値の意味することなどについて確認していこう。

2.2. 体の形態的対立のスケール

2.2.1. 基本的な考え方

前節でも述べたように、体のスケールの値を算出するにあたり、同一の語彙的意味を持つと考えられる（体のペアを成している）完了体動詞と不完了体動詞を、ひとつの動詞語彙という単位として扱う⁵。体のスケールの値とは、この動詞語彙の、完了体と不完了体という 2 形態のうち、それぞれがどの程度の割合で用いられているのかを示すものである。

算出する方法それ自体は単純なもので、まず、当該動詞語彙の、完了体と不完了体のそれぞれの出現数を、総出現数（当該語彙の完了体と不完了体を合わせたもの）で割り、総出現数において両者の占める比率を求める、というものである。スケールの値としては、便宜的に、前者の数値（総出現数における完了体の割合）から、後者（総出現数における不完了体の割合）を引き、さらにそれに 10 を乗じることで算出した値を採用する。

これらをまとめると次のような数式で表わすことができる。

⁵ これはすなわち、ロシア語における「体」という文法的カテゴリーを、名詞の「数」のカテゴリーなどのような「語形変化的カテゴリー（словоизменительная категория）」と同列のものであるという前提に立っているということになる。「体」のカテゴリーは、語形変化的カテゴリーと、名詞の「性」のカテゴリーのような「語分類のカテゴリー（словоклассифицирующая категория）」のどちらと捉えるのが適切かという問題は未解決なままだが、ここでは差し当たり、体のカテゴリーを語形変化的カテゴリーと捉えた上で、以下の議論を進める。実際には、体のカテゴリーとは、この双方のカテゴリーのものが混在しているような（あるいは双方のカテゴリーの特徴を併せ持っているような）、特殊なカテゴリーであると考えられるが、そうした議論は Бондарко (1976) などでも成されている。

体の形態的対立のスケールの算出式

(完了体の出現数) - (不完了体の出現数)

× 10

(当該動詞語彙の合計出現数)

この計算により、10 から -10 までの数値が算出される。値が 10 であればその動詞語彙が常に完了体で用いられるということを示す。逆に値が -10 の場合には、常に不完了体が用いられる。値が 10 に近ければ近いほど、完了体で現れる比率が高く、その動詞語彙は完了体が選択されるという偏向的特徴を有していると見ることができる。逆に、値が -10 に近ければ近いほど、不完了体が選択される偏向的特徴を有していると見ることができる。

2.2.2. 体のスケールの必要性：値の意味すること

前節で見た算出方法にしたがって得られた体のスケールの値は、何を意味していると考えられるだろうか。

上述の通り、動詞語彙という単位にまとめることで、当該動詞語彙の完了体、不完了体それぞれの形態が、どのような割合で用いられているかを算出することができる。上でも見たように、数値が 10 に近ければ近いほど、その動詞語彙は完了体が現れる割合が高いことを示し、逆に -10 に近いほど、当該動詞語彙は不完了体で用いられることが多いことを示す。どちらの値を示すにしても、その両極に近づけば近づくほど、その動詞語彙は、用いられる言語的文脈（意味論的、語用論的あるいは統語論的文脈）が異なっても、一定の体の形態で用いられているということになる。

逆に、0 に近づけば近づくほど、双方の体が満遍なく現れているということになり、これはすなわち、その動詞語彙が用いられる言語的文脈に、体の選択が大きく左右されているという可能性を示唆していると考えられる。

2.3. 現行の体のスケールの問題点

2.3.1. 概要

前節までで、体のスケールの基本的な概念について確認したが、本節ではこの体のスケールによって得られている値をめぐる、現状での問題点について確認しておきたい。

阿出川 (2014) において算出されたスケール値は、大きく以下の 3 つの項目について改善すべき点がある：

- ① 調査対象となっている不定形の出現（使用）環境
- ② 調査対象として収集したサンプル数
- ③ 調査対象となっている動詞形態

本章では、上記のそれぞれについて確認した上で、これらを克服していくために、今後どのような調査が必要となってくるかについて考えてみる。

2.3.2. 問題点①：不定形の出現（使用）環境

まず、阿出川（2014）におけるスケールの値は、「可能性のモダリティの意味を持つ述語⁶と語結合を成している不定形」の体の選択の実態を対象としてデータを収集した結果のみに基づいて算出されている。これはすなわち、不定形という動詞の形態が用いられる全ての統語環境を網羅するものとはなっていないということになる。その他の様々な語との語結合の場合における不定形（начать кричать のような語結合のケース）⁷や、あるいは不定形単独で述語として機能する、いわゆる「不定法文（инфинитивное предложение）」や、あるいは従属節において用いられる不定形⁸の体の選択の実態は反映されていない。したがって、現時点のスケールの値に基づいて、体の選択に際して偏向的な特徴を有すると判断されている動詞語彙が、不定形の他の使用環境においても同様の偏向的な特徴を有しているのかどうかという点についてはまだ明らかになっていない。この点を踏まえ、様々な統語論的環境において用いられている不定形を対象としてサンプルを収集し、スケール値を算出していく必要があるだろう。

2.3.3. 問題点②：収集したサンプル数

次に、サンプル数の多寡という問題が挙げられる。阿出川（2014）の時点でサンプルの収集先として採用したコーパスは、ウプサラ・コーパスである。このコーパスは、ロシア語を対象としたコーパスとしては先駆的存在のものであり、サンプル・コーパスとして高い評価を得ているものである。しかしながら、その総語数が約 100 万語程度と、現代のコーパス言語学の基準からすると非常に少ないということもあり、当該動詞語彙の文法的な振る舞いを傾向として記述するには不十分なものとなっているという点は認めなければ

⁶ 具体的な述語については注 4 を参照されたい。

⁷ これらは、いわゆる「接語的用法（присловное употребление）」と分類されるものである（この術語に対するここでの日本語訳は筆者による試訳）。

⁸ これらは、いわゆる「非接語的用法（неприсловное употребление）」とされているものである（ここでの日本語訳も筆者による試訳）。

ならないだろう。今後の調査では、より総語数の多いコーパスからサンプルを収集した上で、改めてスケール値を算出し、その傾向に変化が見られるかどうかも含めて検証を行っていく必要がある。

より大規模なコーパスとしては、「ロシア語ナショナル・コーパス (Национальный корпус русского языка) ⁹」や SketchEngine®¹⁰で提供されているコーパスなどが候補として挙げられるだろう。ナショナル・コーパスで提供されているコーパスのうち、「基本コーパス (основной корпус)」の現在の総語数は、209,198,275 語である。一方、SketchEngine®で提供されている、ロシア語を対象としたコーパスのうち、最大の語数を持っているのは「Russian Web 2011 (ruTenTen11)」というコーパスで、14,553,856,113 語となっている¹¹。いずれのコーパスも、ウプサラ・コーパスと比較すると、200–15000 倍ほどの規模となっており、サンプルの収集にはより適しているだろう。

2.3.4. 問題点③：動詞形態

もうひとつの問題点は、現行のスケール値が、動詞の諸形態のうち、不定形のみを対象としたデータに基づいて算出されているということである。これはすなわち、当該動詞語彙が、他の形態の場合に、どのように体が選択されているかという点については明らかになっていないということになる。

このことは、体の選択の実態の記述、更には動詞の文法的振る舞いを把握するという観点からすると不十分なものであり、様々な動詞形態のデータを対象として数値を得るという作業が今後必要となってくるだろう。この一連の調査を行なって初めて、現状観察されている偏向的な特徴というものが、不定形で用いられている場合にだけ顕在化する特異な傾向なのか、あるいはそもそも当該動詞語彙の場合には、動詞形態に関わりなく、一定して観察される偏向的な特徴なのかという判断が可能になる。また、この調査により、時制形態と体の形態選択に関するデータも同時に得ることができ、両者の相関関係についても記述が可能となるだろう。

3. 今回の調査の内容と得られた結果

3.1. 今回の調査の目的

前節までで、体の形態的対立のスケールというものの基本的な概念と、現行のスケールの値についての問題点について見た。今回の調査の主たる目的は、こうした様々な制限の

⁹ URL: <http://ruscorpora.ru>

¹⁰ URL: <https://www.sketchengine.eu>

¹¹ この後者のコーパスについての概要は以下の URL を参照されたい：
<https://www.sketchengine.eu/rutenten-russian-corpus/>

下で算出された現在のスケールの値が、その制限のいくつかを取り払うことでどのように変わるのかを検証するという点にある。

そのために、種々の条件を変更してスケール値の再計算を行い、現在の値と照らし合わせて比較・検証を試みる。また、不定形以外の諸形態のデータも収集した上で、それぞれスケールの値を算出し、形態の変化に応じてスケールの値がどのように変化するかについての確認も試みる。

3.2. 今回の調査の内容

今回の調査は、時間的な制約も大きいことから、今後のより規模の大きな調査のための予備調査として位置付けることとし、サンプルの収集対象とする動詞語彙を絞り込んだ上で調査を実施することとした。

今回の調査で明らかにすることは、以下の2点である：

- ✓ 調査①：当該動詞語彙の不定形が用いられる際の、統語環境の制限を取り除いた場合の純粋な出現頻度数
- ✓ 調査②：当該動詞語彙が、不定形以外の動詞形態の場合にどのような使用実態を見せているか

まず調査①により、当該動詞語彙の不定形が用いられる際の統語環境における差異という要素を一切考慮しない状態での体の選択実態について調査を行ってみる。

次に、調査①で、統語環境の差異に関わらず、一貫してスケールの値が10である（及びそれに近かった）動詞語彙を対象として絞り込み、これらが、不定形以外の形態で用いられる場合の頻度数について調査を行った（上記調査②）。今回は、動詞の諸形態の中でも特に使用頻度が高いと思われる、定形（非過去形及び過去形）の頻度数を調査した。

いずれの調査でも、サンプルはナショナル・コーパスから収集することとした。

3.3. 今回の調査対象とした動詞語彙について

今回の調査は、今後の調査のための予備的な位置付けということもあり、まず、阿出川（2014）においてスケール値が10を示していた（＝完了体でしか現れてこない）動詞語彙を取り扱うこととする。具体的には、помочь / помогать、оказаться / оказываться、представить себе / представлять себе、/ случиться / случаться、позволить себе / позволять себе、заставить / заставлять、показаться / казаться、отнести / относить、купить / покупать、восстановить / восстанавливать、заменить / заменять の、全部で11の動詞語彙がそれに相

当する。

3.4. それぞれの調査の結果

3.4.1. 調査結果①：統語環境の制限を取り除いた出現頻度数

この調査では、不定形という形態が用いられる統語環境の差異という制限を取り除いた上での使用頻度を調査した。単純に当該動詞の不定形を文字列として検索にかけている¹²。

下表に、上記の動詞語彙それぞれの、ナショナルコーパスにおける不定形の出現頻度数を示している。「完」、「不完」はそれぞれ完了体、不完了体の出現数を示しており、この出現数の比率に基づいてスケール値も算出し、併せて示した（便宜的に通し番号を振っている）。

表 1：ナショナル・コーパスでの動詞語彙の出現数とスケール値

	動詞語彙	完	不完	合計	スケール
1	помочь/помогать	18533	6441	24974	4.84
2	оказаться/оказываться	6627	191	6818	9.44
3	представить себе/представлять себе	5445	493	5938	8.34
4	случиться/случаться	4776	137	4913	9.44
5	позволить себе/позволять себе	1414	192	1606	7.61
6	заставить/заставлять	7454	1102	8556	7.42
7	показаться/показываться	4704	5015	9719	-0.32
8	отнести/относить	3830	586	4416	7.35
9	купить/покупать	14184	5209	19393	4.63
10	восстановить/восстанавливать	4794	903	5697	6.83
11	заменить/заменять	5785	749	6534	7.71

3.4.2 調査結果②：その他の動詞形態での頻度数

先の調査①において、不定形の統語環境の差異に関わらない、出現総数のスケール値が 10 に近かったのは、оказаться/оказываться と случиться/случаться だった（いずれもスケール値が 9.44）。このふたつの動詞語彙を対象として、不定形以外での形態においてどのように体が用いられているかについて調査を行う。

まず оказаться/оказываться から見ていこう。以下表 2 では、非過去形の出現頻度数を、

¹² 動詞形態の重複の可能性については、第 5 節にて改めて検討する。

表 3 では、過去形の出現頻度数を示している。

表 2：非過去形の出現頻度（оказаться / оказываться）

		完	不完	合計	スケール
単数	1 人称	263	208	471	1.17
	2 人称	195	146	341	1.44
	3 人称	7240	26030	33270	-5.65
複数	1 人称	276	273	549	0.05
	2 人称	168	63	231	4.55
	3 人称	1981	3826	5807	-3.18
合計		10123	30546	40669	-5.02

表 3：過去形の出現頻度（оказаться / оказываться）

		完	不完	合計	スケール
単数	男性	27999	1471	29470	9.00
	女性	17161	967	18128	8.93
	中性	35887	1630	37517	9.13
複数		17933	1640	19573	8.32
合計		98980	5708	104688	8.91

次に、動詞語彙 случаться/случиться の場合を確認しておこう。同様に、表 4 では、非過去形の出現頻度数を、表 5 では、過去形の出現頻度数を示している。

表 4：非過去形の出現頻度（случиться / случаться）

		完	不完	合計	スケール
単数	1 人称	1	5	6	-6.67
	2 人称	3	1	4	5
	3 人称	4979	5402	10381	-0.41
複数	1 人称	1	2	3	-3.33
	2 人称	0	0	0	0
	3 人称	95	1367	1462	-8.70
合計		5079	6777	11856	-1.43

表 5 : 過去形の出現頻度 (случиться / случаться)

		完	不完	合計	スケール
単数	男性	2020	111	2131	8.96
	女性	2193	159	2352	8.65
	中性	28977	8229	37206	5.58
複数		360	1264	1624	-5.57
合計		33550	9763	43313	5.49

4. まとめに代えて：今回の調査結果

本節では、今回の調査の概要と、そこから得られた結果から示唆されることについてまとめることにしよう。

まず、調査①として、阿出川（2014）において、不定形が可能性のモダリティの意味を持つ述語と語結合を成す場合に、完了体でのみ用いられていた（＝スケール値が 10 を示している）動詞語彙を対象として、不定形として用いられる場合の全てのケースでどのように体が選択されているかについての調査を行った。

結果としては、スケール値が変わらず 10 に近く保持される動詞語彙と、スケール値が大きく変化する動詞語彙とに傾向が分かれることとなった。とりわけ大きくスケール値が変化したのは、помочь/помогать（今回のスケール値は 4.84）、показаться/показываться（同 -0.32）、купить/покупать（同 4.63）などであった（表 1 を参照）。

一方、この調査①により、оказываться / оказаться、случиться / случиться というふたつの動詞語彙については、不定形として用いられる統語環境の差異に関わりなく、完了体が用いられることがほとんどであるということが明らかになった（それぞれスケール値は 9.44 ; 表 1 を参照）。この結果を踏まえ、このふたつの動詞語彙を対象として、これらが他の動詞形態の場合に、どのように体が選択されているかについて調査を行い、それぞれの時制形態ごとにスケール値も改めて算出した（調査②）。その結果、これらの動詞語彙は、その使用実態について差異があることがわかった。動詞語彙 оказываться / оказаться は、非過去形の場合にはスケール値が大きく変化するものの、過去形の場合にはやはり完了体が多く用いられており、不定形の場合の使用実態と近い傾向が観察された（表 2、表 3 を参照）。一方、動詞語彙 случиться / случиться は、非過去形の場合、過去形の場合共に完了体の使用頻度は大きく下がっており、したがって、完了体の使用が極端に増えるのは不定形で用いられる場合のみということが数値上確認された（表 4、表 5 を参照）。

5. 今後の課題

本稿では、今後の分析のための道筋を明確なものとするために、試みとしていくつかの動詞語彙を対象として調査を試みた。しかし、上でも述べたように、これはあくまでも予備調査としての位置付けのものであるため、まだ解決を図るべき課題は残されている。

何よりもまず、主に時間的制約のため、ごく小規模な調査にとどめざるを得なかったことが挙げられる。今後の調査においては、別の動詞語彙についても同様の調査を行い、結果の比較を通じて検証を進める必要があるだろう。サンプル収集先のコーパスも、今回はナショナル・コーパスだけとしたが、今後はその他のコーパスからのサンプルも利用した上で改めて調査を行う必要があるだろう。

動詞形態の重複の可能性についても考慮しなければならない。ある同じ文字列が、出現環境に応じて異なる統語的役割を果たす場合があるが、今回の調査で行なった検索は、単に文字列による検索であるため、このような差異の峻別までは行なっていない。このような、動詞形態が重複するケースは、不定形と過去形がそれにあたるだろう。不定形は、不完了体動詞の場合に限り、合成未来を構成する要素のひとつとしても用いられ、また過去形は、仮定法の際の述語として用いられる。今後の調査では、これらの可能性を排除した上で、より正確を期する形でスケールの算出を行う必要がある。

また、意味論的な観点からは、動詞語彙の「語彙的アスペクト」の差異について考慮に入れる必要があるだろう。上で見た、体のスケールの値が 10 及びそれに近い値を示している動詞語彙には、例えば *случаться/случиться* などのような、Vendler (1967) の動詞句分類に端を発している、いわゆる「語彙的アスペクト」のうち、「到達 (achievement)」のタイプに属していると思われるものが含まれている。この語彙的アスペクトに属する動詞は、ロシア語においては、不完了体動詞がいわゆる「現時・持続の意味 (актуально-длительное действие)」を表すことができないという特徴がある。こうした意味的特徴の差異が、体の選択においても影響を持っているという可能性が考えられるため、このような影響の有無を検証するべく、異なる語彙的アスペクトのタイプに属する動詞語彙について調査を行い、振る舞いの異同を観察していく必要がある。

今回の調査結果を踏まえた上で、上記の課題の解決を試みながら、不定形を始めとして、動詞の諸形態のそれぞれがどのような言語的環境においてどのように用いられているかという網羅的な記述を目指した調査が今後も求められる。

文献

- Бондарко 1976 — *Бондарко А.В.* Теория морфологических категорий. М., 1976.
- Брицын 1990 — *Брицын В.М.* Синтаксис и семантика инфинитива в современном русском языке. М., 1990.
- Шелякин 2006 — *Шелякин М.А.* Русский инфинитив (морфология и функции). Учебное пособие. М., 2006.
- Энциклопедия 1996 — Русский язык. Энциклопедия. Изд. 2-е, переработанное и дополненное. Под главной редакцией Ю.Н. Караулова, М., 1996.
- VENDLER, Zeno. 1967. "Verbs and times". *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.
- 阿出川修嘉 (2014) : 『現代ロシア語におけるモダリティとアスペクトのカテゴリーに関する一考察——可能性のモダリティと体のカテゴリーの相関関係について——』東京外国語大学博士論文。 <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/80223>

Notes on the description of the grammatical behaviour of Russian verbal aspects: using the concept of ‘scale for aspectual opposition of Russian verbs’

Nobuyoshi Adegawa

Our previous research shows a certain tendency in the aspectual selection of the infinitive which is used with modal predicates of ‘possibility’ (*мочь, уметь, способен, можно, нельзя, возможно, невозможно, в состоянии, в силах*). We found that some lexical items are used in a certain aspectual form (perfective or imperfective), irrespective of the linguistic (i.e. syntactic or semantic) conditions of their usage. In order to grasp these tendencies in the selection of aspectual forms, we introduced the concept of a ‘scale for aspectual opposition of Russian verbs’.

In this paper, the author conducted two types of investigations to check the extent to which other linguistic conditions could affect the usage of aspectual forms of verbs.

With the first investigation, we picked up the aspectual pairs having 10 as their value of scale (i.e. the perfective form is always selected) with the given modal predicates in our previous research and checked the quantity of these lexical items used in a form of infinitive with another linguistic corpus. The statistics showed that two lexical items have the same tendency in selection of aspectual forms, even in another linguistic environment.

In the second investigation, we looked into the usage of aspectual forms in another temporal condition with these two aspectual pairs. The statistics show that one item shows nearly the same value of ‘scale’ even in other temporal forms, but another does not.

key words: Russian, verbs, grammatical aspect, investigation using corpus data